

(様式 2-2)

令和6年度「校内サポートルーム（KSR）研究指定校事業」成果報告書

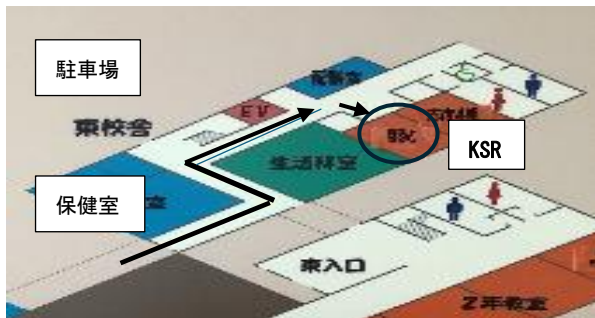
1 指定校・指定校群 （ さぬき市立志度小学校 ）

2 実施の内容

個別最適な学習環境、個々のニーズに応じた学びの場、安心して過ごせる居場所づくりのために

ア KSRの配置と動線

保護者の送り迎えの際に対応しやすいように、駐車場から近い場所にKSRを設置している。他の児童の目に触れることなく入室できるように、学年の靴箱とは別に、保健室横の入り口から入れるように、靴箱を設置した。登下校の度に保健室前を通ることで、養護教諭との関係づくりにつなげられるようにした。



イ 教室内の環境整備（安心して過ごせる居場所づくり・多様な学びの場）

- ・部屋の様子が入口から見えにくいように教室入口ガラス部分に掲示物を貼ったり衝立などを置いたりした。また、カーテンをして外から見えないように配慮した。
- ・くつろぎスペースと勉強スペースを作った。くつろぎスペースには、ソファや座卓を置き、リラックスして過ごせるようにした。ソファは、保護者が来室したときに対応するスペースとしても活用している。勉強スペースの机は、横に並べて個人のペースで学習が進められるようにした。
- ・普段は勉強用の個室や仕切り等を設けず、窓側に児童用の机を配置し、学習する児童はその机を使用する。テストや学習状況調査などを受けるときには衝立をし、同じ部屋で集中して取り組むことも可能である。
- ・部屋のレイアウトは固定されたものでなく、児童の実態（利用人数の増減等）やスクールカウンセラー（SC）の助言で随時変更している。

ウ スクールカウンセラーの活用・組織的な支援体制の工夫

KSR担当のSCが月に一回程度来校し（年間36時間）、雑談やボードゲーム等を通して、児童と関わっている。

SCによる個々の状態や変容の的確な見取りは、今後の支援の方向性を定めるためのよい助言となり、支援への迷いが小さくなるとともに見通しをもった教室経営を行えている。また、管理職や所属学級の担任、SSWや心の教室相談員等が随時児童と関わっている。



3 成果

(1) 校内サポートルームにおける児童生徒の様子

ア 利用児童の登校日数の増加

主にKSRを利用している児童6名のうち、2名（低学年児童）は朝の時間のみ利用している。中・高学年児童4名のうち3名は、昨年度と比較した今年度の欠席日数が92日⇒3日、120日⇒4日、178日⇒97日となっており、登校した日が大幅に増えた。また残る1名は昨年度の3学期から不登校となったため、欠席日数は昨年度よりも多くなっているが、定期的に登校を続けている。他に、2か月程度臨時的に利用し、現在は学級へ復帰している児童も1名いる。「学校に来るのが楽しい、休みの日も学校に来たい」と意欲的に登校する姿が見られる。

イ 受け入れられる環境が常にあることによる、学校の中で安心して過ごせる場所の確保

利用児童は4月当初は保護者から離れることに不安がある児童が多くいた。他の児童、教職員と触れ合い、活動の楽しさや児童間のつながりを登校目的とすることで、少しずつ登校時刻が早くなったり、終業時刻まで滞在したりする児童が増えてきた。また、他の児童との関わりが増えたことで、自己中心的な傾向のある児童が他者を気にする言動が見られるようになってきた。拠点となるKSRがあることで、学級にも興味をもち、授業や行事に参加したり、給食の配膳や清掃などでも、他児童と関わったりすることが増えてきた。

ウ 校内で安心して活動できる範囲の広がりに伴う自信や自己肯定感の高まり

KSRは管理職、その他の教職員が部屋の様子を気軽に確かめられる環境であり、児童はいろいろな大人との接点をもつことができる。顔見知りの児童や教職員が増えたことで、校内で安心して活動できる範囲が広がり、教員から離れて子どもだけで校内を動けるようになった。掲示物の貼り替えや作品の返却など、校内で他の教員の手伝いをして称賛されることで、達成感や自己肯定感の高まりにつながった。

エ 自分で判断して行動できる力の伸長

学習や日常生活において、自分ですることを決めたり、自分でできることに取り組んだりする中で判断力や意思決定力が高まるとともに、進んで行動できるようになってきた。また、自分の気持ちを他者に伝えることができるようになってきている。



(2) 校内サポートルームにおける活動及び支援の工夫

- ・児童の変容を共有できるように、個々の児童カルテに担当教員が活動の様子を毎日記録している。そのカルテを管理職や所属学級の担任をはじめ、SSWや心の教室相談員等複数の教職員が供覧して児童理解や対応に役立てている。複数の教職員が関わることで多角的な見取りにつながっている。
- ・登校時にできるだけ担任と顔を合わせることができるよう、提出物をなるべく自分自身が直接担任に渡せるよう付き添っている。また、給食当番や清掃活動など参加できる活動には参加できるように見守っている。
- ・学習については、所属する学級の学習の様子を伝えたり、興味をもちそうな学習についての声かけをしたりしている。学習が遅れがちになるため、担当教員が個別指導を行ったり、AIドリルを用いたりして自分のペースで学習している。その際にKSRだけで学習が完結しないように心がけている。また、予定表をつくり、誰がどのような動きをするか、教員も児童も全員が把握できるようにしている。それぞれの予定を確認しながら相談して活動を決めており、コミュニケーションスキルやソーシャルスキルを身に付けることにもつながっている。

(3) 総括

不登校傾向のある児童は、集団内における不安感が大きく、人間関係の構築を苦手としがちである。そうした児童にとって少人数で過ごすKSRでの活動は、自己肯定感の高まりや集団内での人間関係を再構築する貴重な場となっている。KSRの教室があり、専任の教員が配置されることで、児童は安心して学校生活を過ごし、それが登校につながっていると考える。上記の実践は「さぬき市教育相談担当者等合同研修会」でも発表した。他の参加者からは、不登校児のケアにかかる本校の環境整備や別室登校への対応について、ぜひ自校でも取り入れたいとの声が上がっていた。不登校の改善は、長期的なスパンで取り組むことが必要であるため、KSRの担当教員は、複数年にわたって同じ者が担当することが望まれる。研究指定を受けた1年足らずで大きな成果が上げられており、ぜひ次年度も継続した取組を行うとともに、本校だけでなく、市内の他校にも本事業が拡大することを期待している。